

# 医療ルネサンス

No.4304

2004年、娘に連れられ岩崎メンタルクリニック(神奈川県藤沢市)を受診したA子さん(59)は、ギャンブル依存症と診断された。パチンコをやめたいのに、なぜやめることができないのか。

「意志の弱さでなく、病気だからです」

院長の岩崎正人さんは、そう説明する。

発症の仕組みは解明されていないが、ギャンブルが強い興奮状態を引き起こし、

ある種の脳内物質が分泌されるなど脳内の変化が起きて、その行為をやめられなくなる、との考え方がある。大勝ちすると再び大勝ちを狙い、負ければギャンブルで取り戻そうとする。

依存症になりやすい人には、共通した傾向もあるという。

岩崎さんのもとを受診する患者には、人付き合いや

## 依存症

3

## シリーズ

# ココロ

自己主張が苦手で、「自分には取りえがない」と考えるなど、自己評価が低い人が多い。

①父が暴力を振るうなど家庭内に問題がある②子供をひざに乗せてパチンコを打つなど、ギャンブルへの抵抗感が少ない家庭に育つ

③貯金をしないなど経済観念に乏しい——といった点も見られるという。

回復には、精神科医や臨床心理士らによる個別のカウンセリングと、当事者同士が集う自助グループの会合(ミーティング)への参加が有効だ。

# 「仲間」と苦しみ語り合う

A子さんも、受診の翌日から毎晩、自助グループの会合に参加した。1回1時間半、ギャンブルにはまった経緯やこれまでの人生を語り合う。互いの発言に批判も助言もせず、静かに受け入れる。話したくなければ、黙ったままでもいい。会合は全国各地で、教会や福祉施設を借りて定期的に開かれる。最初は恐る恐る会場に足を運んだ。

「ギャンブルに夢中で、大事な約束をすっぽかして友人を失った」「家族の定期預金を勝手に解約してパチンコに使った」

参加者は本名を明かさず、聞いた話は人に漏らさないルールがあり、みな正直に体験を語っていた。涙声の人もいた。周囲からは、好き勝手にギャンブルを楽しんでいるように思えても、本人は苦しい。一人一人の苦しみから共感でき、Aさんも自然に、ヤミ金融に手を出したことを話した。

半月ほど通い、回復のための女性専用の宿泊施設に入った。一軒家で6、7人の依存症の仲間と共同生活を送り、毎日連れだってグループの会合に行く。

1日数回の会合で人の体験を聞くのは、自分自身を見つめ直す作業でもあった。宿泊施設に戻ると、これまでの生活や自分を取り巻く人間関係など、気づいたことをノートに記した。

そして、なぜギャンブル依存症になったか、理由がわかるようになってきた。



今年、パソコンを始めたA子さん。日記をつけて自分の心を見つめている

- ギャンブル依存症の関連団体・施設
- 自助グループ
  - ▽GA(ギャンブラーズ・アノニマス) 全国各地で会合を行う。ファクス046・263・3781
  - ▽ギャマノン 家族・友人が対象。info@gam-anon.jp
  - ▽ヌジュミ 女性専用の通所施設。電話兼ファクス045・743・5854(月~土、午前9時~午後5時)
  - 電話相談
  - ▽リカバリーサポート・ネットワーク 050・3541・6420(平日午前10~午後4時)パチンコ依存問題を抱える患者、家族専用